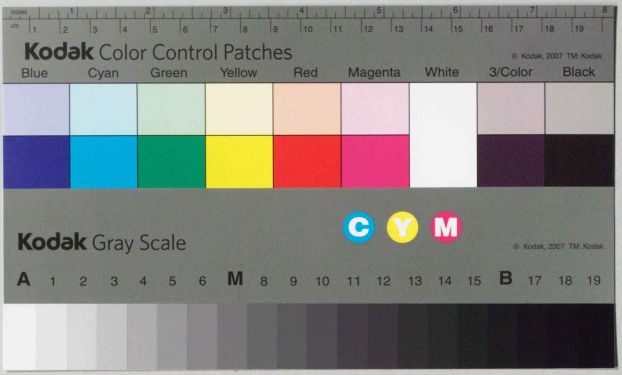
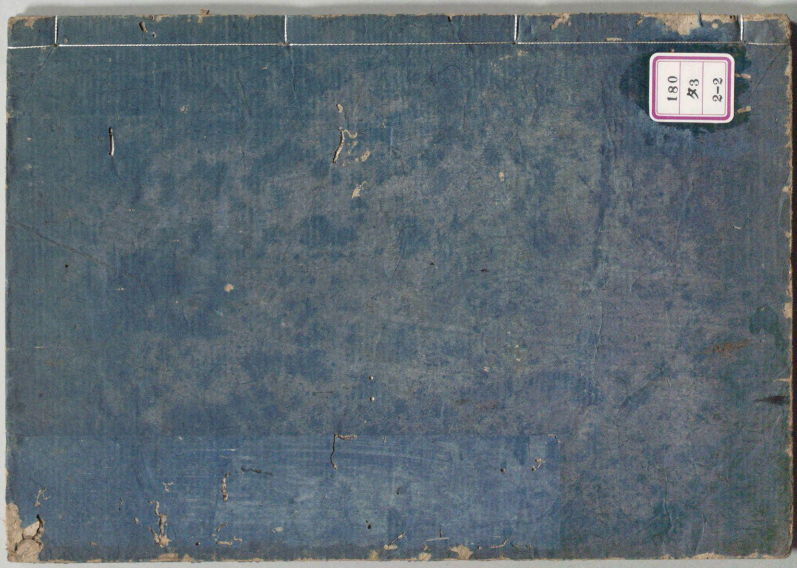

Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19


180
Z3
2-2

愛知県図書館
昭 39.11.25 購
114318
4/80
ヲ73
2-2
愛知県寄贈品

おもてなるのやうもかるひごくをとしよりの陶慶之
のおのしハ花ーき申くるハさ〜ふ立ぎるりなれバたぐ
しるよりふ仕せくと云仕しなぐ〜ふ業といとおむ
ふ立くハゐ一世風りの路よ仕ものてはせのみと志
きくるちの報宿ふ書と志もくるよりもれとうり
てその名と志もてる人のたぐいるんら書ふ祝宿ハ
寒ちの体ふあ〜ぎもぐ陶慶のおのそハ記より記
志一むぐうりなりその時俄ふ物ふて紙と嘆しも
甲斐あ〜ぐ一志仕ハ乙仕とそも情とまるうりな
きば志一ぐふあ〜ば郭ち〜きばとい山ま一

なーーるべふ六字の名号なればなげきは門更
ふ勤めるべしいまはしいまはしとのたまがぬむ一の時
要鳴酒おのあき業いふ所き中ゆても人
間と思ひてやとーふ道ひふるぞーーと云
又人間を思ひ聞と偷ゝて勤めなどいうべけとま
らぬといふ事やあるされば所ーーて法ゆる道
ばとりすて人のひろいとふものーてえ所
ゆるぎーのなきうり又を法ごげれをうぎる
なり中くふゆるぎーのなきうりやいで正亟
ふてうりなん道ゆよ能ばざるよあーーばゆざる

なりとゆる正ーくえよあさまり海婆の人おいけく
ろいうざりて事加なく為ゆ十ゆ為て獄卒
のいまーりよあんとき和どう仮りのがんや深波
瀑の境ゆを隈茶の果りるふりー焼熟立間の
火の中ハ苦が事其の極なるあ為ばくるきあり
さ地を思ひやるこを出ーくれいふ所ーくとも
為百迦千迦のこ仏の中され思ゆやあるべき
毎所寝んとゆるるき隔俗の思いをおーてゆふ
ひいさ正をとゆるもよき事なりえ言なの
ばを汎説ふ中ゆりはさをを歌ふ所仏説経十

却てまたもとのまんまにかぎり移りてよかりもしそ
せめて移ぎりそ一取中に移記をするもも
あるべきもとそれぼの中とまあてんとなりいと
うしこきえうしいよそそ一いうていそがい
一き人いを毎の十とをの法なりとも熟むへ一又事
業所に置いそがしくいに取くるまゆりて他行せよ
事を先上人の行ふ人に行ふ業所の取とば云聖教のこの
とりあるも祖師ふ時の宗旨先の様に志ばれ
ものこのそてりたとうとうる事ぞう一発して
角ってもとをんの中まくやふそうしをまて角一

とと屠の白樂天をたひ肥きす矣をきるま
ぬるるりあってもとをんをやばとうて勢じて付
とをんの家業の管をき抜ばいるりざ一ぞう
もどるふ法るか一さんが生の者のの来ハん
ぞふ立一者しまかるひるば世のいるこハ為さも
角ふもとを一紙て情感の雖終法ハ一切衣笠
若ハ行若ハ世一切法虚ふ皆とをんをるるとをんの
物と移ばばとて恵んの法生要集ふ今とをん
と安心るるい色服の絡この物行を遮るふ行ば
只世間男女生義行住坐卧をこハば時虚法源を

語ばをとゝのへふるまひ乃ゑ孫統はせをと
敬ふまるとその侵匠を仰るすゝゑ仏よ〜ゑれ
ぐゝゐゐとゝて惟と書る家筆を作ゐ家業
しゐゐゝゑ仏てゐゝてゝはをゝるゐ本浄
比丘の後廣乃筆ゑ浄ゐ佛法を業とするものゑ
仏と作ゐ〜猶中〜て性をゝるゐ中樓禅
師の性を業ゑのをゐゐ系を飯を作る家ゑ仏て
奇ゑの旗を作る事ゐる家禅師の山堂を法ゑ
ゐゐゐゐゐよゝ仏ゐる事山の下女乃ゝ仏後佛家
僕ゝゑ仕〜ゐゝ日深ゑ仏て家野の性をとゐげ

ゐゐ頃念中比ゲ渡の人家業〜ゐゝ〜ゐゐゑ仏
〜ゐゐが孫統の時病なく猶中合者〜て性をゐゐ
法人孫業〜て結縁を頼羽ゐゐゐも縄ゑをきハ
〜て事綱を乃〇ゐゐゐゐ家怪ゐゐゐゐゐゐゐ仏い
ゐゐく忙〜きゐて法ゐなく家業ゐゐ明ゐゐ半
ゑのゐゐ〜ゐゐ明ゐゐゐゐゐゐ忙〜
ゐゐゐゐゐ仏と作ゐべきゐゐ宗ゐ〜て仏ゐゐ
ゐのハ唯好生の一深ゐゐゐゐゐ家〜ゐゐゐゐ
仏ゐゐゐのハ現世も好ゐもあまさ仏ゐゐゐゐ
潜なるゐゐ〜孫ゐ家業〜ゐゐ勧ひゐ仏

を利益なしと云へり　然で此しきりの永く
世中の為を後ざまにせんそのりなき大慈
大悲ふて家業ふもさハりでと云へ　然るを
世ふ類ひなき情の深さるべしかるいかを
学てぐふつとなるこのおうこ恵を人皮と云る
法華経とやいをんよふたへ　一もなくそれも
やるそも宗論の世のかハりをやけべき為を
らもふたそれ　ばどくんなく後面半で必
なるこを始ちるのを迷ひ来るるこのうさふ聖
中の法水やるくしも云ふと教ひ生なるこのとと

ろひをげしてくんを引立て一人本ふ
あ一ばねちばとのづ〜餐んをとゝばんを
ふどう賢きちかこきふもうけさざうけう
ざんを云ふむ一けの口説あり今をとゝ云へ
経師の法ば方のすぢ式てなむしもこれとト
ぶ〜をとるとれ　ふを一部の事をし
ぶ〜これをとゝれ　ふを一ぶ〜これとの孫ちを聖
家業しなぶ〜これをとしがもこれをとゝ人を取て
家業をあ人をとるのをぬかち家業ハ世二代の
体をれハ未来永劫の体ををなち教よを物ず

来あり事繁煩あり如何ぞ一事を去るとも紀ハ
ものいちをふをーとも紀いなかりし事業ハ求
なりとも紀をなして事業といふなむしきを
事業となしてさをぐし紀を除かりをハ
迹きふあるてをきふ祇む日ま見ものをしば
まあやまりしばやまいハ枝ばあるて限る十分
とるも寄ものをしーひ茂のおくく他
行ばば事業とも沿ばなきをも傷ハ沿
一筆毒潘のかーとさをるしあるへ一戦毒策
ふ之る鬱と輪と二ハなぐし沿ちーたりーよ

とくかうひめるとれば名ふ紀と紀ー爰をのハ
をるのとと紀ものとと紀ーー

○出事ハいと紀をるまるの

それ沿門ハ俗事の繁ふ緒と離きて清浄の寺
院を紀ーー永くく三界の宅ーてをふ紀ものを
ふの家数婚姻るして一事の人沿ふかるをれ
ぐむと紀をるふまの一出事ーてと紀をる
をとまの大紀の擬事業敬而作沿門一向
なるとを紀を書紀の文ふを無やり一人ふと紀
ーて出主父母師傅檀越の恩とも報ーをる

なき年なり又屋文伝記の記もとゝれみく
滅とるの取代湯指伝西天の辭譯ふ筆海の
ふ云傳ふ又ふ伝ふ都なる部略ていと
たのもしくぞれもほゆる れなて野ふかう山よ
かりて伝の行業を授るとも御隱を神ゝびて
於戦しくさきぐ記ふ人ゝ姓名の名と勧めん
こと素の世ふ西の行なりめむ一大通結縁
の人伝樂御恨の名の祝ふ一宗三賢の徳とけ
しらじと願せ祝ふて三千年長遠の間云祝
ふ報也ゝ祝ふ今氏一行ともて世ゝ四次の

はせをとげ十地の報行り祝ふ勧ゝん年ふ彼ゝ
まゝる間いくそぐぐや濃ゝ西源行藤のたま
ゝの時ゞても報行りあるゝのなりは祝比丘尼
比丘尼ゝの報と立ふいどんば祝ふ長生ふ常
没の報勧ゝて行祝の行なるゞ一今や
者ゝ者釣の恩と為ゝ勧めゝげまゝ
いあるゞ一行又恩ゝて西伝氏威傳をゝ
伝法灌頂とゝ伝ゝふ三昧行法の間の
年生行法の上の年なりゝ一別法行法陳祝
行法なゝていゝふ特戒法灌頂て一会ゝ南

一酒肉五辛の類をばまことしれえと食
する人あらばあるべからず事なるべと
若尊の說を法門に引きて出家はとてより
若尊のそ寶人天の尊師なれば有る別時の
軌則をもちゐ法法淨ふ正仏ん之を所きを
のそひ出なるべきを故に舉世若尊大師は戒
律を堅く護持しゆ事事律の制よりも已
るまし　忠若法灯禪七箇條制誡の中ふて
ふ若水大師と又宗戒お家の大尊師ゆして
天王も戒法を授け給ひ又中川の寶光純律師ゆ

受ひて昭光律師お爾の戒とも受ける者法
師ゆ又ふ之ふ中の條を後のいるまに法ひて戒
律を護りふんで事をなしあれるとふ
我はその羊を見るゆそはなんぢも羊ぞ也
ものとなばその孔のあと言もなくはなん事を少
ひとていふんや雜色の事ふるとの事とも
慶まるふ事ぞんやたとひいてやなりぬも
形のごくその羊ぞ也ねやぞ兄弟ふるとの孫ふ
なんをさくふ正仏な輔をさまるあるぞ
若尊の仏性を極深みて仏教の通俗沙

門の軌則をまもるべしなり元来の弟子等しくこれ
忠の行者勇士同者了義の持戒清浄定の僧
ち護法清浄の比丘の光明古師別伝纂注釈微
の若菩薩戒経菩薩瓔珞経等よりくり抜き入て作り刈
るべし　又凡人は生涯をかけて仏を信ずるう
水中の月のごとくなるべし　毒鼓若乗の説等よ
抜ぜしきに時は仏を信ずるに世と推移り
て更に澎湃たるなるべき江河情の流下絶の
光世三界魔の美時江がありさまをそのぶべし
又凡僧の内よ茶敬仏あるべ出家の書いてうて

身を清め仏像法華を拝めて経ひもるべし
一向に清浄を志ざしを不敬の事むかし
むし　洞家牧牛和尚は活禅者なりしかども
首座をぶる清舶を混ぜるとて元を摸出
し　西山若恵上人は特に茶敬仏式をもうみて
不清の時は手を出さぬ　ぜひ清てとなん
清ふたふとき事ぞし　又古字の名号を南無
あいだるまいだるまいだるまいだるまいだ
となるるの大なるあやまりなるを略と
仏といふて手ざ略い事なり後人僧を集及い

淨土教の祖師よりは淨土を正せり若等國光
二大師の時はかやうの儀軌さしふるーー元時代の
世の惡人を見てもじめるすみて法眼の宗教よかる
いざる三惡の行なれど出家するものはかやうの儀を
正ーー出家の人とよくかうきやくこれは立
世ーーー又光明大師は目覩の人を訪ねて弘
さも廣法の下數ゆで軌の義ーーてを弘門に入き
師ーーは遺法を若のぶものはるよりて弘弘
面の志ーーをそげまとべーー武は門人と弘の人を
見ては兄弟のごくなるものどくたびいるさーー

信心の通ぜざる者ふたもけうちぐくなー
又を弘通の大名知識ありときうば百墨千墨
なりとも加るべ行て義化をうけ口傳を学べー
口傳なくーて淨土の法門を見れば其の得分を
見ふなり淨土宗の法門の六の字も
つ人てをいるをたふとき人ーのるふも出人を
あーーーきすふん信るの名号を称ーて
ふのぶーぐりんいと口称ーきりざふあーーぐや
ーては世の一大事ふは能くんを入べきーーて
ーーあやまりて邪法ふ入るべ来永劫の苦

きるべし一物法といふべくて云百生の野狐禅
を弄るたわしもあるぞし古徳ふも彩人が正法
をうけて正法を彩法と為といふり右水大師生世
の時ふもし一乗義の邪法を説し人ありいえん
やと仏祖百年のはとや安心肝銘まもれば万
行いとづふ絶を彩所彩教ふいはるべくば
又末の世の人を煩悩さうるゆ師を離き友と
離もて片隅る物侵まれば孤独してなは
くを乳母ふはふ為ものなりる雄の立る所国
刹為い西仏房ん家の先跡ろい合まべし庵中ま

あうて芸庶まるまるて仏あのりなもたしい名
字の侍ものも仏人ろと芸侍まると云和の侍家と
為けて人天の福田ともと人けうて元と侍ものと
まべば切徳を場る事ものく金利弗用達と侍
芸ものふ天なる事なしと貴思徳は侍ものく
凡夫なまこども意侍の徳をるくるいるくる
利髪漂なして仏弟子の報ふつるるぞし
かの醜狂の内らるふ利髪やし法を門いけ因
縁ようて侍ようはるし墨絵色比丘尼いむし
戒まてふ為ものとうんて生れの生のいきし因縁ま

ようてゆゑの五世ふまもこの経漢のさとりとなり
きしをかくいかて十七出家の因縁いかうなれは
事なきを一日一夜出家受戒する功徳は七宝の
塔を立てそのうるさ三十三天ふいるよりもまさる
ちりを法の法をうけ仏法の海にかくれ入る
やしも武蔵寺彰佛の法をうけ給ふ然者入
るかぶしたのもの　授菩提の法法の海をわ
るためしなきよあらたなれを出家いるさ
とを佛ーとるよう

○五方ゆいとを仏とるよう

為よいしくくとも世のんじけみうんとのいまの
庶者なきんたそやあ志いあまを信人の御業
事れはくして仏法仏りふ功を金ぐ〜ゆ
とを仏のまを御業ーおぐ〜ゆとをるふりーと
時ある事なく易行易行の要法とそれはの
ゆ報誅をて報をとる事なりぐくいをとも
ゆふりとをとるだてふ〜ぬ来い一遍のを仏
とも称法はおぐ〜を大光明の中ふれさめより
ゆ〜ゆあふさぎるさふたゆるりなくお侍ーて
とをるとして祈願とを仏合掌ふも唱称仏ハ

定業なれいてりぬとそうしたもいぬぶふお後
ちど決定はなの事業をお辨きべきなりまし
ぐもふて世流りの事と管こおぐ〜ロふとるつる
と西仏い宮の法川のくんまるく綾の苔環とう
かん〜んのほまふけをきてりとも〜の行末
ととる〜ろざこたまを遠色出の眼ふといふおい
もてればとんぐ者ちて徒といい人ふてばもん
の内のとりげもがかといけこととすあるなるべ〜古
人も肥親ふ宮を偽てて一人ふと仏せよ竹の林
ちげもども水の流るふを流りなきがぐく世と
の事ちげくともも仏い流りなく通るぞといつり
又大るりりと流んとれもふる水の後弓ときんとせば
偽ようる初ぐるべしろいきりてらしぐ何
らもとりふ内ようやる流りもつることのなりれ業
〜ぐるること仏ちんも又けまといりるるべ〜行末
事業の管とふる濡り孫ふ濡りて髪ともとろ
〜宮るる下ふかくもを仏りてゆやりふと仏れ
ちんとれもい地獄ふ入るんとるべ〜ちゆい人
と行ふのはる紙聖ふ宮のけりいきのふとと人
ものぐ〜出ぬまやるる飛波浮ぐりきあ〜の

世のおろかに淵い淵とする癖者ばいで来ることを
ゆきかもいざるよ病を文て死よ陳まんときかびび
悔も甲斐あんや昨とやより恵よと云ひと
昭あるんでめでとうだきかの中遠法師が
まきしのきくきと悔し志しのごくちは一定性
生ハ一てんやあく後祖翁ゴ沢をまるぶすな
うるく又見支の徇年い常ふ安恵安のこな
もしとももいまと何る癖なれざもれなき事
なりけ安ゑとやんとまるハまと何の月皇と
きりてきてんとまるゴごく　あるおとりく

ゑ仏やふとまきく安ゑる目とりけあを成家と
まと安ゑいおうでかあもしもかいばくてゑ
仏とるなり安ゑゑを者のごくゑ仏いと人る仏
より歌の内ゑと人ぶふ飛をばたいあき者あり
ともぶりる不法る事ハるとまごきなり強て
安ゑゑとごめんとまるハあき者と淨ふゴく
いとうぶくハく淨ばるるを志びち法る鈴を
やめて止よ帰まれでその止いあく鈴ごとく
世の法ふさりく忠沢るなりるくとやいふる
されで光角かまハ忠ゴるとて法るなり比とを

仏仏上人の歌をあとのもるき中ふあるとふんとて
中くに月の清らかなるまとを流ぜりとあ傳の口決
なり中略法師も一仏名を唱じて百千万の親を
拝ふといえまくに今のことに同じかるを仏
を唱えるとて好ぐ唱を唱えさまげるを
いあるぐりに和よと稱仏一称の風を迷ふ唱えるの
中を拝い西中十劫の月をのぐりし信ふの中なる
深ぐ実ふ巧るる成実なり又房宝よ入を魚を
ふい中蘇芳と今りい酒を飲る口ゆて後流後
尼を浸漬まれで功徳ある事なく亡者の退

落ふも利益なき旨摂蔵経楊仏後隆後尼集
論蘇婆呼者尼文殊根本儀軌法帰元直指
法花持験記ふる尼ふ法ふ中ふ酒を
て中略尼庫の雷嗜酒を犯し者ふ後隆後
尼を浸漬まるい号して功なきこのなり卿ふ
を仏いまとふ中乳の易ふ和して仏後中和と
ふ〜ばに的度法経をふ〜ばに庫尼庫とふ〜
ぐふ法ふれば俗人者ふ俗仏ちんゆまく忘
勝ふ中ふ〜ぐりに白ふ俗と甚ちんぶたなり
ば孰い者を光上人の唱仏名義集及ひ名志上人

の行ぶ用ることを問ふ答ふ事しく紀ちれよそと仏
乃法門ハ出家よ慮してハ出家よ行ひ在家よ慮
してハ在家よ行ひ出家よ慮してハ出家よ行ひ
在家よ慮してハ在家よ行ひ更ふ又ふさぐ所なし又
世の中ふ常に刹餐の食あるとも清ちありて汚
ざるを保し苦労よりるものあり乞ハ大なる僻亂
なり万事ハ心が因緣よ紀をべし時いてハ刹餐
を用いてしかとハ俗形のまふて仏をべしと仏ハ
かくく餐の時をふ上ハ時を使して食するを
もて好要とをひし苦為庵とて人隙絶の

時ふ隙を遣徹してと仏如ゆ〻ば悉しも出家よ
ちしく十ハ刹ち十ふ〻生じ百ハ刹ち百ふ
〻生ずと少るり元亨釋書よのさち敏
都洲天樂明元ふよも在家さふ仏在俗仏の
さ為ふげうきるとゆちち俗塵居士須達長者
ハ釋尊の弟子なるもしも一生刹餐をとりなく
龐居士霊照女々馬祖の弟子なれども妻よ
るまで俗姓とあるくあざりき龐蘊居士湖國
夫人と極楽ふ上てその弟子のまふとを仏をとげむ
在し又ととち事ふの習ひ慮俗為慮よ食

臘二河の流きりふ濃り紛るともあらしも撥後さだ
白浪さして舟をしされて立家はうきさ
紅葉されてしまつ

○石あいと紅ゆるまつ

左京の月卿中宮亮はあの大納言でその歌ふるく
侍るやさしきたあるさ藤実よ天上の人なりかる
尾花をもあいよくと紅ゆしてはのせふいさぎ
よ紅葉の中を栖とさんすを紅とべきまてされ
ど摂政関白道長左保関白兼家堀川右大臣
頼宗野宮左大臣公任大宮内府実宗花園左大臣

小松内大臣右四中納言石山院兼雅右京権大夫
俊民源卿鞍馬小僧ゆれ侍人堅書のと紅ゆ
なりき中ふも月輪禅定殿下い忠仁五十一代の祖
孔雀代摂録の臣して家を定をふ又都い
なくぞ又く侍るされども宿縁の僧を不ねせを木
ふ志しをくして紅さまふ紅と紅ゆ
特ふ選抜集の歌部をしりも此選抜集ハ宴
乙の作ありおこりて末代百年の末までも生死長夜
の雲路を無をぬ燈さり異ふをばろけの因縁よりあ
ざ人しをしめり宿と勝て大法を孔通とる

の乳頭をすぶし、ふるるこのみてやあり、牛羊の
眼の淚をそそぐべきよあり、仁淨堂の関白の第に毎
日校のもとに分て七日のうちにもれを治し給ひしに
いとめづらしうまして侍るを本草にもとあるべき
きものかぎりふ記し、ちうふ松の内皮の中分の乾
物をとりうべしもとづくもとめやすしはうを
名ふも本草に例しきくなきうちうんちう今
を淨土ゆていうるを蓮とうふ、ゆもばし
くさをうしの侍る末の世すでも炒物の上にとりばくは
粉末の侍るのたり、ゆやまもとこの生の松樹

侍名ゆるべし　吉田中納言俊光の紙ぶすまに
して家ふるぶ中の紙をきき宮ふるもれの
ゆ家にして家ふの亟と結て枕にうるはいと
あつまふぞ中人の中納言家はいとき紙ゆ
人ゆて家ふあるしはもあつまるなくして紙の
月をうるやとを乾はるはうを大臣にまかれ
て家ときふもれしんしに注をのまうとと
うげもふうの茶の保胤は遠江郡沖ゆふ花
とふし注を注と作てもがうの志と述
ちう大江匡房は和泉のかうしゆく狗ゆつくて

さてまこそる達人なりしかどもいかなるものにかあらんと
うらやけ侯はをかをつくりて世ふ伝へより家
傳の書はハ十巻ありて始めて長谷寺のあり
さまをいろいろ法しゆ入を詩ひとやくしもはい
るとをもうぐりしまを悔そ去きりよ侯ひと
こそしば武蔵の天王寺ゆてせそのわ歌をはぐりて
連歌せしもとるそのゆふかくぐりうぐりまをと
ゆふはばとをもうしばかりしき事と詩ふるとを
でしいんかきあるよ侯ゆまぐふも略紀伝の社の夕
暮よりみとあはをハきりてぐれはくゆるれはて

[illegible]の[illegible]ハもいく大夫人のもてあそびものにて
常をを侯しゆをもをきしのあと代との撰集ゆもか
はく及ぐりゆ移西ゆの中の[illegible]歌西ゆの西撰と
もいふをきゆ花さきしの嵐の庭の雪ゆでゆやく
をのハ我身ゆりりりと侯しゆ様とゆまをりゆ
れまひしん人とも花をさきてゆくゆめよ
ゆ家ふさもてとれば人て手ゆの風ゆく身ゆ志む
やふぐれはゆるいをげ人侯流のふものかふ
ををのりとをるばいりりをしんの侯ハゆをば
ふをぐりりりをいりりりと侯しゆく

はくとゝゐの後を語るぞうし　世ふ部る部ひの
ふをたのむるるしき海よるハまびめじもと郷
じ　あ川月はんの法ゆれぞうき世の中ハ紅
うをざりうりとまくるも世との夏をさして
一ゆふ部ふひ入るんぎしのほどいうんうなく
たくふうに幸ようん侍る事ゆうふれたるもう
んとも引きなし　やどよりもとぐゝゐれるは
ぼしくぞ者もひゆる和歌の徒用ハいとふうきもの
なりけんぞやくゝゐれば部ゐれるを二ゆるる
法定世の人うるべし　されてゐるハまゝゐ御

もるふうう

○武家ハゐれもるふうう

礼とまびめるを法ひる事ハ武門のつゝさどる所
なりゝ　それ甲冑を着し白刃をこう
たちる敵陣ふ入りて義文をけづり弱をうち
尖花を散して攻戦ひ勝ちを弓ふて事ゆ命
既るあやうくゐゆる時さふ何事をうな世のた
のゝとんや世ゐれのゝありて武時の大要ふう
中古武義ゐ侍人身構を神忠個ハ武門の家
よりもるれぞる侍世の志しはくして吉水大師

よ帰伝一日深き仏一名ゞ建久二年十一月二門
聖詔の半ばるより勅命を蒙て山門を訪き
遂に戦ひ敗陣たびに入り就て軍敗る
事なるとき右方新好て多ひあまたの庶員人
多ばれまえたりて仏と成ぬ俄に陽中合者
一元なのを仏くはるを見て大法をとげ
法雨を天の戦場ふたち又来る妻室の愛を
入て時く怪ふはせしを世を苦より脱ふ
弓矢の勇名とも失ひ又法の恵ふ隠とも失
いで眠世少てい見ふ恵と恵して名を万代なお

怪せふ浄土ふ法せ一て仏果の位ゆる涙を
恵一矢恵さとい恵ば一かるたゞろ
軍陣の内ふしも勅の用ふ立ゆる法門いを仏ち
ふよ又もあるば一と求るい法ゞを戦場ともて
恵ふ菩提場とゆを不思議とゝも深なり為
国為仲伊豫守源和義新発之帝義光伊
入形軍楊守輔西明寺時頼大漸之帝大胡を
帝宇陳文ふ之帝国四方帝熊谷沢帝陳戸之
帝相模ふ帝ハ三ゆ恵ふ仏ふ恵ゆのを仏ふ
中ふも為仲ハ恵ふ仏ふ恵を帰一て法義と能

夫一日深ゑ仏一万遍たゝなく修ゆ法華の
本懐とゝ思ふ事ゝ原朝義ハ新命よりて十
二年の間奥州の羽敵の陸奥任家任と合戦
し都ふ帰りて好堂新入道が所ゝ化よりて深く
ゑ仏門ゆ入りゑ仏の底ゝふ感涙を流してその
源堂の内より大原まで流ゝ出大原より出へ
流ゝ流るゝつゞく人ゝ涙ゝ流しての歌ゆ
ゝを決定やりゑ仏の時胸ゝ題ゝ深ゝ流して
面目流望のゝ人なる事いうゝ奥州ゆて衣
川の館をせめなとさんとせし時のゝとふ文ゆ

といふゝる源ゝ古今ゝ帝ゝる大文まのゝゑ仏ゝ
世敵ゝ人ゝ敵ゝ人ゝいふる加藤の城廓ゝ帰時ゝ
ゆるんとゝ見ゝ給ゝさてめゝゝ世をやゝ
しゝる時ゝ流ゝの世ゝ朝義の子息新発意
義光ゝ原ゝ弓馬の道ゝ達ゝ原氏一流の棟
梁ゝ一ゝ義ゝ時ゝ仏法信仰の志ゝ厚く
して日深のゝ仏一万遍とゝ唱ゝ修行やゝる
為ゝ清ゝ三井寺の内ゝ法住堂と云ゝ所ゝ修行の
時ゝ堂ゝ中ゝ入ゝ来ゝ法ゝ仏ゝ生ゝ息ゝ絶
ゝ清ゝ光ゝ有ゝ仏ゝ抱ゝ奉ゝ仏ゝ中ゝ見ゝ

鎮源ハ此新羅三郎廿八代の末孫なり熊谷次郎
直実ハ一の谷の軍に先陣をとげまし熟蓮と
も號れしかぞその名天下にかくれなし源平の
乱にありて功深くしかれ仏門に入りたれん思なる
事全坊のごとしあらかじめ死期をしりて
往生人鏡也し建永二年九月四日に往れし
ねがしく端坐して終まやりぬ又希有なる最期
なり武士ハ仏法はたづさはるましきやうなれば
るハ僻事なり昔の名将をかゝる不乏なるし
楠正成も毎朝持仏堂に入りて後世の勤をこと

ざりきはその勤の後おこふ日比ての行儀の
討死せし事の名をとゞむるあげてまとし名と
忠孝をもしとりや誠にりがつきま奉公んで
りし智仁勇の三徳を備る名将にかゝるや
はしき事もこそあるらんめりなそ武士を
忠を危き事もあるめなれど期りて深くれ
は帰依すべきなりおよそて武名を
止てしれなよとふハいろじ唯しれしおづから武名
を折ふ恐きなりしれハすでく武名のさまとげ
といふし給かくりて武門の誉との ぬめる甚じて

武士の郎よりまた武ハ戦場武ハ自害の郎よりのぞみて信仰とまるてハ仏ようる事いるーさんも
習ひ出ん事ハ有るべからざれを時よりあるて云る辯ド
ゴうきを辯論落ようくり常くんがけてと云
仏ヤんてあるまばーきるざるを日頃と仏のんが
けなきとのい所ハ嘆て無業ようとと云ると来
世の働きもあるべーあまど無ようら祭ゐれ為の
名聞ようんと所ハ又魂魄その地ハ迷ひさまらて武ハなきさけび武ハ大と叫ってまあるとろ
ーー我知るそのたゆーーかーーさびれるべき

ようなり又日比と仏のんがけあるとのハもとより傳
ちとまとふ事ハ御ようまとふがとく法花を志
ふとう又世を志ふがとくるんで所ようのぞみて
なき難を扱がとくいるーーしけせる魂んを為め
び所ようと知ちよ浮ちと法をーーつるよ仏果
の修ようるよ武名ともちるーーちび又仏ようと
も法ようるーーその信者雪所のたびあり所く
ふまべき事ぞーーー中古より我朝の風俗ハ
出陣の時武所を祈て祈願ハの出立をとるとと
武士のいさぎよ所ようひーやうも所のちれる

軍場にかるべき西門より出るの道に出るべし
張倉を出しこき倉に張を射掛てよろこぶと
いるとも古今の人ぞうて目を感ずるなり
ゝ一ゝ云ゝ云ゝて引いるきゝのこ
れもひろ云ゝ弦帷子の出立にるふこゝを
るいさぎよ紀伊はるべし又うを射掛
よ放矢あり後矢をもぢゝていはの矢をた
のゝて初の矢を当矢のひあり所一矢をもゞ
さゝんを一節にして勝利を高ぶるとなる
行事ゝを云ゝを惜しるゝ又云のごく

弧弓を雑人ていゝ云ゝ当矢のひあり所に
一節にして注の的を云ゝの一弓を定むると
要ゝゝ後矢をにくむよいあるべんのまど
りると時にてなり弧弓をにくむよいあるべんの
弘ゝといゝてなり一弓なれどあるべ当弦
一矢をもゞかるべ的中を乞揚由が
百発百中の秘伝にして又若年大師一百則
注の秘伝なりされども矢の放矢さるべ
注の放矢とめる弟子百ゝの法門なりその
云ゝ法定の大伝を記しておのしも弟子を

紙ハざるを拝要とせり　中納言殿ハ鎧ハんあ
らばはせの船よりぢを乗ぞ　たゝんが笑ふ
の谷ぶ八之山の京ゑとも敵の軍ぶ〻敗へ
てつゐゑ級軍　中納の平家の人ゝ西土川
の水ゐと源氏の軍ぶうと鎧ハて叫かゝたら
まち滅亡の苦とれがごゝ　たゝそ少も紙ぶ
んを学武皇帝京都の時澤地海の浪と紙ハ
ぶて練ぶの紙と中ぶうを大澤の天下と中異
ゝ行ぶぶゝうゝ　そハきりて一ん弟九よ
ゐ仕ゐる安んハ鎧伝が書沙清水の陣の時記記

よ入りて活機を出ゝ　さ拾るゝ　そうゐふ
ゐれの一ぶとゐて矢ぶよ出ぶの船迫を仕るゐ
ゐ四軍ぶ火平の軍のごゝゝ　勇猛決烈の
志　を立ゝ安澤ゐ鞍ハを西めざるゐハ項王が
答をひりれを志ぶりて昨之日の鞍と拾るん
敵ゐるゐ　生死若海を渡ふ出新ゐんゐふ
さ入を作ゝ乗船ゐが中沼川の先陣と渡ふゝ
さゝ　西業沼時の梁武ふ月とうけゝ蒼地
時ふ西方と拾て蓮行半ハ新田義貞の孫
舎攻のぶゝゝさゝ　たゝい人ハふ人ぶふ人ぶゝ

法をさづけもとのまゝ一人はかるべはをきんと相ム
こゝハ陶山小太郎が望をもの最付のごとくまた一
に宝の彼人をふやぐるゝハ楠正成が千剱破の城
の寄手をふせぐがごとくまた一はたゞ法をはを
るべし賜と宣ひる事ハ桜井の宿より正行
を歎まかり一湊川へ出発を抜る討死をこゝ
宣ひしがごとくまた一人をたゞ長仏して臨終
よ後利を切るゝハ義経の腰越のごとく一
を法宣はをの秘決なり絶体絶命の之義の中
ふ妙悟悪魔を降伏ひ一を成仏して

是ハ抜を無念なるを軍陣ふたゝ人なるの義ハ方
とゝふ教を考ぶ一を十ゝ教を修行ふ
ゝ十二部経の中の教ゝ法とゝふ事ハ中ハ
方便名巧なり今又を例て知べし又名
尊大師の法ハ利剱法花とゝ名すありてこ
れ如ち利剱ハ也ハ不動明王ハ熱田大神と同神
なり弘法大師生涯の利剱名号今現ハ京
都百万遍知恩寺ハあり六字の墨書無悪く剱
形なり是ハ甲冑の内ハ也利剱名号を
書き寄りハ也名号を懐中一戦場ハ

けるを号をとゝゝゝんで無慮降伏の要門をあ
らはすを又八幡大菩薩の名号乃ち神なり八
幡の本地いかなる仏陀なるや観音なるか弥陀か
釈迦及び天竺新書ふるくさむ〳〵紙を給
濤の文へ天より八流の幡をあらし出よ八幡
文と称するを作八幡御記文にいはく嘉
嘉の中ふ幡八法尼紙書の三麻郎形なる祝儀
あり此幡八あまを武甚の所要なるものにて新万
の軍をも防ぐ為の鎧よりして進退するの徒を
備へ守り神切望ふ八幡大菩薩と懐姪しを

ぐゝこ鎧をかぶりて目をとゝさぐ防ふ給用して
きやゝ防ふる矢ふ法伏の徒をきるゝ防ふ為のあき
バ武士の宗ふむる神ふちいとおゝ進ちる名なるべし
此八幡ふの本地ふる仏陀の名号をとるゝて知ゝくゝ
現世ふ生を形ゝくてかつゝんるゝて乃ち
取よまでお進ちる事なきさしで建治二年
紀引して八幡ふの祝宝ふ我が地八仏陀なり
我が教をたのゝて仏ふるは仏やもゝくゝ
ぬなりとの給ひしを汐乙集ふ祝ちゝ仏の
神ふるゝ八ぬるゝ乙ふて明ふ志ゝ

さしでをぬぐふをこそ[illegible]とあるべしあるいは神
のめぐみこそ[illegible]て[illegible]ばしてもせりなりけるう
ようさぐふをきふあるべし又七書ふ敵をあると
るものいるべしと人よ揚よせるといひをきさ人の法
ふをこと聞うて用ふを法よせよといつてかり
もまさそのどくろ笑のあよりもまさる為ハ武
藝とまげきと事たこそまぐろい元ことと聞よ
まるなり志ともどし世の事ハ洗流くんをかけて
恥なき地獄を修羅をとちぐろ中ふをれと
修行まろい元用ふを法よまろなりとのまが血

氣よ住とて敵とあるどうな世とあるどろい暴虎
馮河の野狐武者といふものみて武家の事を
ふるあるべるるべ　細川清氏武田信武
今川義元池田信入の俗ふ滅亡ー　がごくさを
なり軍ハ指揮の指と要とと兵庫みて敵ふ
向ふハひろまたしば馮河ふ事ふ陥んでれそを
孫とぬくくなんとあるこて之軍をも使よ中め
といつて不ん人の思恵の報ちとぶ法くいるべ
多と甲拔を住をハ小敵とも侮べば大敵ふも拔と
ちべ軍の為とふるべ不動ハ嘆ふの仕神

小弟拙〻一馬揚板垣逆冦が害の色好と妻
しく仰定一敵陣小細作を入まて虚実を
窺ひ方々用日夜軍策ふよりまて悉くこと
を盡さしし一世の間紙一筆の小弟も
なきを早陽軍記小弟くさうを見人を経よ
まるのよりて邪文武教千字の秘法を
是一摘正成篠塚の時毎取表二百人の
小弟居表二十人を主その上又摘自分毎取
表方法私はを拙く取上ることしやう微
ふき用人をし一色中の一片の紙撚るまで

面方のまのよ体ことばろいはなしの新敵を
義光の目保正仏も又用人を経まるの秘術
ホして家を陶慶王の貴ふ逆ざる紙筆なり
八幡大菩薩義家い奥引ホて敵陣よれもむき
し時光尼の祈祈祝をとくく祈申よ伏勢
あるまを恐ろ家を用人をしもしなるあやう
き難を逃まさうかく又世る云事のあるを面を
又て陶慶猛卒の伏勢以方小陣ちまとさ
うを用人陣くと正仏やはこ恵尼の名き難を
のぐるべし陳平反間の策よく楚を破し漢

を滅ぼしてこの天下一統の大事を成就せり
今又一人と云れの孫ちく安安の孫なと孫
淨土の教人を孫ぐ〜は法の一大事を成就せ
ば自己初ち法華ちん孫ちは籌を帷幄の
中に運らして勝ちを千里の外に決するといい
つる今又籌をと云れの中に運らして勝ちを
陳徐の時に決せど初ち今日の子房ちなり
敵に敗ちる孔明ちる仲達を走らしむる策しあ
まぐちんぐ又籌ちの時と云れして死なの敵ちとた
ちる策とめぐらさげるなんや今日敗亡

生死の凡まの為に就て孫を運らして仏のいくさ
もちく自本と云れて淨土は生し彼土て
苦ちもなく成れるるもを孔明ち奉仕の魏を
もるとき敵の計に就て布て為方の孫を用い
天に勝利をはるぐ〜無ちが沖庭湖の軍
に勝をいて勝を攻さもてちぐ大功をえるも
湖は同じ淨土に策ときべ〜形は劔戟を持て
武士と見えるもども口に云れして死なの淨
土は生れるは又明ち様をを持き明ち孫貪
を滅るの為策ちして敵の不云に討ちのなり

いうる閻魔の使者なりともなんぞ寂しいるゆ
とけんやそれ初ち孫子吳子が絶学なる不大学を
貴ぶるゆ伝ふる不の奥方なり伝也翰挾間の
役も又乞逸を以て芳と代を以て芳を代の
格となり敵也よ涼入ゆ〳〵不身ふる芳我
えのあるを毒して不えるを今時の人と世世世
界ふ涼入ゆ〳〵えれの身をなくハ初ち素代の
義えるゆ〳〵一芳の数冠を以て吸ふ芳逸
以て芳を伐んときいぐのゆを張りんや関ハハ之
ゆの豪傑なれども用ふ芳ざるある孫格よあざ

むきて えゝ〳〵その身を失ひ頃おいその力ゆを
ぬき鼎をあげ氣世代なほい勇之軍ふふむ
らしりて実よ古の英雄なれども昨之の剛
るのゆみして敵て用ふを後よるすゆく血氣
と怨みして敵をあるどり策よ法ゆるき也よ
ゆ〳〵〳〵八千の子弟を失い為江の一戦よ討負
てたちまち自数の芳をこまり敵の怪をゆ〳〵
情ゆんがあゆ〳〵ゆ我ホけ敗敵也玄又の敵よ
ゆい婆婆の多〳〵き星をたりて格ふの中ゆ
る法よ引き涼泥法ふ仕官ゆを杯をひ

而よ八万四千の煩悩魔軍の野武士共けゝを
ゆ〻敷て俄ふ法意をうゝ信び貪欲の金銭よ
瞋恚の竹槍愚癡の棒を並べ立切徳の法城
馬和具を刷ふんと生死の樹蔭を結けふり
けゝ法ん弱くしていかるふ所ふびいふも昨ふ
之為西の魔王波旬大法敵とうち大法螺を
ふき慈悲の胄ふ忍辱の鎧を着ふ金剛信ふの
太刀をさき大乗業力の馬ふ乗り乃至十善の
手綱よ乗て西方の業を海へ三心の幡を押立
五仏の関をあげ熱鉄魚鱗よ倣へて貪欲を

ワてしび至二を之ふ弘通る所ふ一番よ不思の
白波なんで出あゝ魔軍ふよを指ふてしび
やゞて一人当よる西方二十五菩の出迎よ
あひなゞ組なく仏法王の敵ふ乃ふんす組ひ
ふ一乗世法よ弱くて仏法よ通ふ一武ふよ
弱くて仏ふよいるの有実なりさんで武士ハ
事ふ仏ふさるふようゝ

○商人ハ仏ふさるようゝ

市肆ふ移くの品と交易して世の中の用と通
ふとも商賣の石なり風雨を犯て品ふ法ふる

勢もなく衰微を懲て四門多を賜をさ
やびかる安藤の多のれどなと云伝るふよう
まはしり大阪い市中ふありといてり和泉きふ市
中の阪者をざおは一壷ハ伝へるうしろども
市中ふ交りて業と奏き布袋善化芳なる人
を見人ふあるぐきもとも又市中ふ遊化をり我多
の家也上人もと出て市ふ入りてと云伝一服おの
者多の貌変虚妄ふ実へる世人のあり様を
ふて浪人のたとはをるぞとの浪てり人よ
る行ふ中ふ伝へる三昧多もと市中もを
場なりとそうたとそうりる安んぞうし弦人
多けて市の変とぞうびる慈悲おるもけを
のぐく京や上人のかーはきそうしいよ浪して
多い鞆の帳の中ふありとも人ふ中ふ市の中ふ
まじりるそいとるとぐきなりといて親鸞上
人も市中の阪者なりるぞその伝要のあり様
漂落自至すてよふ見ざ風ーきふ地をそと
也猪尾の猪如上人もと出て家多義よ入りく
と云伝ーふとうやさんぞんあるふいもとめて
市中ふ出てと云伝と伝ーふていきんや者ま市

中ハ世ましきなるハいと浪ばしきなりうの桐城の賣人の玉ゑとゑ作して口の中より玉の光ゆを出やしハあらがくなりとくうしやすー元商人ゑ仏のすき標準なるべー れよそ商人ハすゑの利とあゝそふを世者の業とせ給るゑ仏云字の名号ハ云上の大利なりと云ゑ者ゑ法ゑ説給うるんぞ武大利をあゝそふやうぞるゑんや又大業ゑ説給ふ賣ハ涼く義して京しきゞくさとゝ以ゑ云仏さるも又かくのごく人間をかゞゝ涼く義して京しきゞくさば絶て虛仮のあやまちうるゑー 法ゑ者相作ゑの安んなりさんぞ商人ハまゑ云仏されるよう

○農人ハゑ仏さるゑ

農ハ仏のおなり者業ゑ世ふ者ある法業とそれもゆゑまゑ人秋れさりてその能の果物るゑぞなゑ仏さるふよう かの光の時の者人が日出てとき日入て体ゑ斗とゆて仮田ゑ耕して食ふ者のつとあゞくふるやといゝ

ごく農人ハ淑ゑ仏儀氏菊夫氏の風あるかる

淳朴無邪のさま入て一分仙よりも仙やはらぬ本
の本郷まお爲さとなる　又古よりもろう　我
朝よ信仏の原ゝ起れるく民間るかゝ重てう陶
淵明又柳宗元が草廬のおく紀ハ海よ出
玉の風波なり元遠秀ぶ漢澤の遠岳いこる風
れるむやゝ重る谷口のみ出ふ天よの石ふも遠
ゞゞ轉轉て自然いるも殷代の原ゝるゆゝ
いひるまゝ　本邦の蘭菊梅自英義のごゝきも
実ふる原なりかゝ古の義信及び正重房ゞ書
き民間の大ゝ人なり義信おるとも物やゞ

ゞ義ともゝゞ西ふハ極もなく極乎と中我
あけ今を信ゝもゝゞ信ゝもゝゞつゝ
ゝて其ゝ信ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ紀ハ田と耕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
樵ゝ信ゝ信ふゝ信如ゝ人ゝ傳ふて信ゝゝゝ
ゝ為ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
樵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝハ生死自立の趣味ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かんき様と云て云伝るなどゝ云いろ〳〵ありしき事
とのづゝ田おさまりしゝんいてゝてゝ〳〵ゝ事
ゝ事ゝ宇治田原の浄瑠璃ハ農業一ぞくと云伝
るゝて郡内とゝろて宇治橋の傍よる礼と云
人と集ゝて徳用と称一白日ゝ大注をとゝ逆ゝ
ゝ老人と云伝のゝゝき標準ゝるべ一上野ゝの
伝人宝田ゝ命成ゝ田歌ゝゝと云伝ゝゝ多ゝ
ゝゝ伝田作ゝ又ゝゝゝゝゝの行ゝと農ゝ
鄙と云ひゝ云伝ゝゝて田歌ゝ一徳ゝ糸ゝ鄙ゝ
ゝ伝ゝゝて徳津ゝゝゝゝゝゝ農人

ゝゝと云伝ゝるゝゝゝ

○二匹ハと云伝ゝるゝゝゝ

百二ゝゝゝ〳〵の男と逆ハて後ゝ素年の多
とゝ云ゝ一ゝゝ古ゝゝ住ゝゝ宇治の山ゝ勢伝
の多ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ曲ゝ伝ゝゝゝゝゝ
宮ゝ郡ゝゝ元日本ゝ二匹の始ゝゝゝゝゝ
てゝ伝ゝゝ戦ゝゝゝゝゝ又天王寺ゝゝゝゝ月
ゝゝの中ゝ二匹ゝ其の名ゝゝゝゝゝハ世ゝゝ二匹と
業ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
二匹のゝゝかぎゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○大光普照集

是一世の弘法大師利劍の名号及び至德の仏具衆生の名号あるバ百土の人は名号をとなへなど取世出てハ名く工巧の妙と称ふ本よりを浄土の法をきんす又るんぐらしぎりんやむ一
唐土の信南級を治て大仏殿の釋迦と云一ふ
寺西匠の巧る方便出て言き大本とるき一重かぐと引上ると云く法徳は十八願の方便よて
西世界の浄く言き我ホをかぐと移ホ浄土へ引れ
巧しまるまく仏ホとなる日ト明組一丈
法宝と切て法をとこげらと後ふ一の学ス析

藤園堂
300

愛　知　県
1103269961